

L5.43

5 of 6

May 1945

67/14
C

THE TIDING FROM THE LIGHT

HIKARI-NO-OTOZURE



AMACHE SEICHO-NO-IYE

MAY 1945

THE HOLY SUTRA

Nectarean Shower of Holy Doctrines
Masaharu Taniguchi

MAN III

I have seen indeed that the material world is no more than a reflexion,

Vain, untrue, and erroneous it is!

I have seen also that man is the very light radiating abroad from God himself, and that the physical body is merely the reflexion of mind-waves.

Indeed, I tell you: --- The world of matter is merely a dazzling phantom, shifting and shifting on like the representations in the daleidoscope.

Therefore, do never take a reflexion as real:

Man is the reality, the God-Man,

He is the eternal, indestructible, immortal Spirit, and not a mere machine made from matter; nor did matter exist from the first then the Spirit take up its abode, afterwards.

None such dualisms could be true;

Matter is, on the contrary, the mind-projection of spirit:

It is just the same as in the following;

Not that the cocoon had been in existence beforehand, and the silkworm occupied it afterward, but that the silkworm, spinning the threads himself, makes the cocoon himself first, and then, he dares to shut himself up in the cocoon of his own making.

Man's real nature is a spiritual life,

Then, projecting out his mind-threads, he first produces his own cocoon of his body, and then he confines his own spirit in his cocoon;

This is the only way Incorporeal Spirit dwells in the physical.

Let it be realized well that the cocoon could not be the silkworm himself,

So, our body could never be the Real Man, but it is merely his cocoon:

Even the silkworms, in due time, break their cocoons and

fly away,
So Man, when his time, as it is called, has come, shall
also pass away into the spiritual world, breaking out
of his body-cocoon.

Therefore, you should not look upon his bodily death,
as the death of the Real Man:

Man indeed is Eternal Life and so he shall never meet his
death forever:

According to the various states of evolution of his mind,
according to a cycle of flux,

His body and circumstances may represent varieties of
states,

Yet Life Itself shall not fall ill,

Life Itself shall never pass away:

Through the changes of thought-waves that Life will
project out,

Man can also command his bodily condition as well as his
circumstances accordingly;

But you must know well, there shall come the very time
when Life needs his body cocoon no longer:

Then Life shall break out of his body-cocoon, and shall
enjoy the more freedom of celestial land.

Do not take it for his real death;

Real Man is the pure spirit that has immortal Life,
and he is indestructible and never perishes after all.

Thus had spoken our angel,

When in the sky sounded the ethereal music of heaven,

And down came numberless petals of holy flowers in
showers from where we knew not, likely to pay homage
to the truths that had been preached by the angel.

(The End of the Holy Sutra)

Pray we might, through our recital, extend the holy mer-
its of this sacred sutra to all the beings through-
out the universe,

And thus may we, together with all other living beings,
come to realize what is real in our real selves.

氏名	現在	住所	氏名	現在	住所
湯橋セシ		12-4-1. MANZNA. CALIF.	萩原トシ子		2355. HUMBOLD STREET. DENVER. COLO.
國重淳四郎		4-14-B. " " " "	松門寺辰三		720. 31TH STREET. " " " "
小新七太郎		4-6-4. " " " "	金沢榮次郎		12F-4-F. AMACHE " " " "
安井利八		3-1-A. RIVERS. ARIZO.	山口政治郎		11G-6-B. " " " "
塩崎工ツ		3-14-A. " " " "	海野小太郎		11H-3-C. " " " "
今村仁一		16-4-A. " " " "	園野年行		11K-11-D. " " " "
尾辻ミツエ		20-5-B. " " " "	小佐藤清作		9H-12-B. AMACHE. COLO.
西本ハル		308-13-H. POSTON. ARIZO.	小林恒夫		15-8-C. HEART. MT. WYO.
村瀬モト		308-1-C. " " " "	早林常子		9-8-C. " " " "
野地芳子		308-4-D. " " " "	永田初江		30-20-A. " " " "
藤本初女		308-5-A. " " " "	鶴田ハツ子		20-9-C. " " " "
森川一美		306-6-B. " " " "	常石芝青		2-7-C. " " " "
茂見勇		17-7-D. " " " "	菅野今朝治		RT. 1 BOX 190. ROCKYFORD. COLO.
西園琴		17-8-B. " " " "	吉原光太郎		R.F.D #2. SHELTON. WASH.
豊福たまの		17-9-D. " " " "	三宅田四郎		R.T. 1. BX. 300. WINTON. CALIF.
栗屋定子		17-11-C. " " " "	山崎政五郎		40-11-E. HANT. IDAHO.
大内田春代		17-12-B. " " " "	西久志		ADRAIN. F.S.A. MISSA. OREGO.
大内田一雄		17-12-C. " " " "	水口藤一		6010. 50. HARPER. CHICAGO. ILL.
藤井立衛		3846. S. LAKE PARK AVE. CHICAGO ILL.	原豊三郎		" " " " " " " "

10H-7-E. AMACHE) 本誌発行 事務所
COLORAD.)

10E-5-B. AMACHE) 本誌執筆 吉田米藏
COLORAD.)

◎ 住所録

『順序不同』

(第十七回)

氏名	住所	氏名	住所
門脇安次郎	2226 1/2 LARIMAR ST. DENVER. COLO.	梶光氣次郎	28-12-E. HEART. MT. WYO.
武本正勝	1125 GRANDVIEW AVE DENVER COLO.	藤光シズノ	15-22-E. " " " "
田淵善三郎	909 BRIDGE ST. BRIGHTON COLO.	和田フミ子	23-8-E. " " " "
鍋田美内	7G-9-EAMACHE COLO.	田中柳平	9-22-D. " " " "
山口豊志	7-4-C. " " " "	山本左太郎	22-13-A. " " " "
射場ナツ	12F-7-E. " " " "	工藤静子	12-21-D. " " " "
奥田藤江	11K-3-B. " " " "	磯山直吉	22-7-B. " " " "
相澤房次	11H-1-D. " " " "	倉田藤江	23-12-B. RIVERS. ARIZO.
向畑フシエ	8K-7-D. " " " "	垣内ハルエ	5-8-C. " " " "
富田マス	7K-10-B. " " " "	砂田義典	227-3-A. POSTO. " " " "
亀重綾子	17-14-C. POSTON ARIZO.	山内夫人	219-3-C. " " " "
近藤要市	19-13-A. " " " "	森山夫人	222-5-D. " " " "
黒江正秀	22-3-A. " " " "	大塚夫人	227-13-A. " " " "
中川セキ	22-2-A. " " " "	上村夫人	227-12-E. " " " "
請川巴	22-8-B. " " " "	増田夫人	227-11-A. " " " "
鈴木静枝	306-5-C. " " " "	坂口亀司	11-7-4. MANZANA CALIF. " " " "
泰源次郎	316-8-B. " " " "	本庄喜七	4-6-1 " " " "
喜多直次郎	326-4-B. " " " "	松岡物代	11-6-2 " " " "
中野嘉吉	323-10-A. " " " "	近良吉	2-11-3 " " " "
南出タケ	323-3-A. " " " "	梅本ヨシミ	30-14-3 " " " "
古田スエキ	15-17-D HEARTMT. WYO.	田坂高雄	5-8-5 " " " "

消息欄及後記

筆者

四月号の筆を虎了する頃であつた、唐澤師は、今息の結替式に参列や、聖典生傘の實相、献本式等、其の他所要を滞ひて、傳馬中に旅立たれた。亞町傳道や光明誌の製本且つ又遠く海を越へた布哇誌友會及び地方誌友諸兄弟の信書應答果ては新誌友の申込みに對する送本

と、パノラマの回轉するか如き目まぐるしい中から忽然と抜け出した實に最初の旅行であつた。すつかり新鮮味をたっぷりな氣持で銀燈旅行をも兼ね、十日徑滞在の上ヒヨコリと又10日の人となられた。待つて居つた松田先生を先きには上田氏などとの對面話しや土産談にてのり會堂に於ける誌友會も盛況を呈し砂風に吹き荒んだ一向め心もお蔭げ様に一清淨となつた感謝

感銘である。

○元櫻府誌友會の重鎮であつた、藤

井立衛氏はワル―レキ、エリ當所に轉任され以来、年余亞町誌友會の光明普及事業を援け迄働かれた。一身上の都合上市我古市に居住されてより同地方の同胞に光明普及の其の緒につかんとする時不幸にも客月下旬志を空しく淨念の客と行かれた。而し誌友一同は深く同氏の死を悼み厚く平意を表す。

編輯後記

本号の編輯に就ては、他を生ずる爲めには常に人の美点を觀る、更らに又愛行の上の心得、而して又自己の人格尊嚴を重し眞理を傳へ自由自在に神のため

に働き善も執すれば善をめぐす、大善は清濁併せて飲み全ての人を救す。處生上の敎理を記載しました。今日の体験集には、本部道場に於て口述せられし、藏居氏直々のもの、實は四月号に記載の筈なりしが編輯の都合上長文の爲め止むなく編者これを要約し本号に載録しました。

讀者の御解を乞ふ。

△秀逸の体験談が有合せの二方は御申込み歡迎す。

所で正月早々突然ひどい蓄膿症が起つたのであります。それが又、亦、イン
チキ見たいで朝の十時から正午頃までに鼻から左眼上部、掌大の痛み午後には鼻
汁が盛んに出るのであります。然し昨年の五月の足の病氣と十一月末の胃病が全
治してゐるので、既に経験済み、とて平氣なものでこれ私の過去の業が自壊し
て行自淨作用の現れと感謝してゐるうち二週間程で誰れにも氣付れぬうち、
完全になり、本當に頭が澄んで来た様です。氣持のよい事は勿論です。私に此
頃もう愉快でくで嬉しくて、有難くて、誠に手の舞ひ足の踏む所を知らず、とは
こんな氣持を言ふのでありませうか、じつとして此儘であられないので具體的
感謝を表すために飲友遠仲間を招んで大いに飲んだ事でせうか、今は生長の家
誌友です。二月初旬から三週間を期し毎夜一時間余りにあたり、祖先供養の爲
め聖經讀誦と共に兵士、と不幸の人々に向ひ光明思念放送の事を行じておま
す。又毎日聖典の讀破。メンタルサイエンスには今年に入り無飲席であります。
今私は百才迄位は生きられる様な氣が致します。合掌 二月二十七日夜 認む。
私禁酒記念に買ひたひと申してゐました、ペンを買ひましたよ。パー
カー、五十一番の上等、笑つてはいけません。一金一百弗也の價格、自分ながら
感心してゐます。この百弗のペンで第一番に御神示を寫さして頂きました。
次ぎにこの便を書きつゝあるのです。中略 いつちも私一人だけお蔭げを澤山
受けながら御礼が出来ないのを濟まなく思つてゐます。よく知る外ない私
ちですわ。

三月十八日

繰り返しく暗へたのです。無理する必要はないと思ひまして、半日だけ休みました。それが、それ切り休む事も無く食事も三度、普通食を欲しいだけ食べました。有難い事には頑固な胃病も一週間で征服してしまふした。胃が健康になつたとして別に取り立て、申上げなくとも善いのです。それが、それにつけて大変な陰を受けたのであります。胃が善くなつて三度の食を採り乍ら大好きな例のお酒をやつて見たのであります。どうも味が悪くて、又胃悪い様な氣がします。三度程やつて見て同じです。から止めました。やがて元氣になつたので、お祝ひに一折やつて見たのであります。どうしても、あつて、其れつ切り、もう飲まずに過ごす事になつてしまふした。

酒を飲まないのと、ご飯がおいしく余計に食べられ、とても身体の場合がよく愉快でたまらない。夕方はみつあり、實相が讀める。以前の一杯氣嫌で見るのとは大差を違ひです。今はニケースのビール、一ギヤロンのワイン、一本上物、ウイスキー、ガケツケンの隅に置いてあります。埃が積つてゐます。降誕祭に主人から上等のワインを頂戴しました。二人で一折宛飲だま、棚にのせてあります。それを見ても今は少しも飲みたいと思ひません。新聞、雑誌の酒類の廣告、酒店のショーウインドーを以前は念入りに眺めたものでした。今はその必要もなく何等の魅力も無くなり、又煙草もプレゼントに戴いたのです。これと魅力も何等の價值もなく、そのまゝ、目前にあります。一寸お可笑しい様ですが事實であります。仕方ないのです。

◎ 誌友雜信

コラト州傳馬市アハ木街三三五

上田 直

前文御免下さい、皆様御元氣ですが、お伺ひ申上ます。私共はもう毎日毎日総てに恵まれた生活、感謝の生活を續けさせて頂いておますから、喜んで下さいませ。扱て昨年の十一月から書かうくと思ひ下り一向に書ず本當に失禮ばかりしてゐまして、誠に申譯ありません。日が重なるにつれて一そう書き悪く、なりませう。故今晚は思ひ切つて書きませう。簡單に片付けさせて頂きませう。氣に成る事は片付けよとは、生長の家の教へでもありませんから。第一に生長の家のかぞえ歌。あれはとても都合のよい時に送つて下さいました。有難う。傳馬市では谷口先生の御誕生祝賀會を十一月十九日の日曜日にやりました。あの数え歌が前日の十八日に着きました。それで十八日の晩から歌の稽古です。歌の節を知つてゐるのは私一人なので、十九日式の始まる迄、先生を勉めました。お蔭で喉をかりしてしましました。だが、皆さん、あの歌氣に入つたらしく私も愉快でした。さあそれからです。生長の家として誠に皮肉なもので、上記の御祝ひの翌日から私の胃が急に悪くなつたのです。食てから三時間おすると吐氣が催し氣分が悪く、どえらい事になりました。だが私は矢張り生長の家人でした。靜かに神想觀をすまして考へて見ましたけれ共、これと云ふ原因が見付かりない。で只私の過去業が消えるのだと感謝として頂き胃病はすかり神様にお預け、只管、實相を念じつゝ仕事を續けました。

胃の工合が悪くなると「肉体無し、病氣なし、痛みなし」現象は心の影、これを

今迄の、悩みは遠い百年も前のことのやうに思われました。先生の教へにありますが如く
私は本當に自由になることが出来ました。稀には体や、腰が少し痛いと思ふことも、
ありますが、その痛いのけ、私が痛いのではなくて、そこに有難い生命の躍動があると
云ふことなのであります。唯これだけです。その日から電車に乗りましてもバスに乗り
ましても、ご飯を食へましても、人を訪問しましても、何も彼も私と一緒にニコニコ笑
てゐるのです。矢張り笑つてゐる。自然に緩ろんでゐる所の私になつたのであり
ます。此神の宏大なる御恩、有難さ、何とも形容の出来ない、ゐても立つてもた
められないやうな喜悅に充滿されて居る次第であります。私の病氣は勿論家族の
病氣、不幸、事故等はぬえぬ私の心の影であると解つたのであります。本當に此
の明るい心、本當に心の中が喜びと笑ひを胸いっぱいに取り入れまして、國家構成
の分子である所の家庭の淨化。と光明化に努める積りであります。
病氣を治し、自分の体を健康にするが如きは、私共の考へとして、難事では
あつて、到底出来ない事であると考へてをりましたが、一度御教へに依り心の眼を開
かして戴きました以上は、健康を獲得する如きはこれ寧ろ序の口であります。一瞬ノ、に
新しき生命が甦へり、生れ更る。一步一步向上致しまして、もつと強く、もつと忠良な
る一市民として勇躍して人類光明化運動實踐に邁進さして頂きたいと存する次第
であります。くどいやうでございますが、谷口先生、その他の諸先生、或は先輩の方々
の御恩に對する所の私の感謝の心は到底拙き口を以ては表現出来ません。
皆様の御想像にお委せ致します他はないのであります。有難うございました。

初めは氣かつきません。楊枝を使つても、アツツ、腰叩いても痛くないのですわ。これは変なところがあるものだ。どうも可笑しい。もう一回捻つて見る。矢張り痛まないのです。心を落ちつけて冷静に考へて見ても、矢張り痛くない。その痛くない瞬間に何かキラキラと光るものを見ました。それが見えませんでした。それが今です。それは「遠の今」の自覺です。吾が子に説びる處の氣持を私が起した。先祖代々、大事を先祖流産したもの、雖も大生命から出たところの貴重な、亦嚴肅なこの父、遠に生きたる處の吾兒の生命、この生命を拜み尊び、これに感謝しえれに説びる處の心を今迄持ち得なかつた私が、本部で先日からの教導に依り、初めて茲に心からお説びをしたのであります。この感謝和解の心一瞬既に私は神の子になつたのです。神の子になつたが故に病氣が消えたのです。神の子に病氣はない。私は過去現在の此の相對世界を飛び超て絶對境に入る事が出来た。だから病氣が治つたのだ。キラキラしたのが見えたのは當り前である。それまでは因縁に感じがりめに搦まれて、身動きも出来なかつた所の惱み苦しんだ私が「遠の今」を悟つたのである。もう私は一切の因縁を超えてキラキラ光る光明の世界へ入つた時過去の惱みの一切の影が無方に捨てられてゐるのを見ました。以前私の惨めな、胃潰瘍も腎臓も或は肝臓も又家族の色々の不幸あるいけ日々盗汗が出たといつては寢巻を引つ替へる哀れな姿はもう其處に投ぜられてゐたのであります。萬物と和解した時に、あゝ私は全く自由となつて、「又遠より又遠へ」絶對の今への自覺。その絶對といふのは「今」の外はない。「今」は生命である。大生命である。神である。その外に私は住む事が出来ない。そう私が信じた時に、

す。観念的にはよく解るのですが、どうも確固とした力が出ない。「吾れ神の子なれば
吾れは常に勝利者なり」神は渾身の揮てあるが、凡てのものを一つなるものに委
也」死ぬるも生きらむたい一つなるものに委せてあれ」斯ふ云ふことはよく解り
ます。併しそれが信念として、力として、私の内部から出て来ないのであります。從
つて痛みは舊態依然たりの状態でありました。一月二十三日大連を出まして、船中食ら
く「實相」を讀で参りました。二十七日に参りまして色々み教へを伺ひまして三十一日迄
五日間、三十一日に巽忠藏氏の脊髄癱の非常な重病が短時日の内に治つたと云ふ、
御体験を聴つた本人から服部先生の前でお伺ひしました、後で思へば、その時に
私の体の細胞の悉くの中にその信仰の種が打ち込まれたのを分りました、
その時は未だ解らない。午後一時「圓相の間」にて別の講師先生のお話を戴しま
した時に同席の方が質問をさつたり「身内に誰か流産された方はないか」と云はれ
て「さういふ方があつたらば名前を聞いてよくお祀りなさい」かういふ御指導を受けて
たりしました。それを私聞いて歸ります時入信後五年の人から、四國かどこかの方で、
癲癇の方をお母さんが伴て来て、以前亡くなつた、子供、流産したところの子供に
名前をつけ供養した處その病氣が治つた、かういふ話をして下さいました。本部から
出まして、宿への道すがらもその話に何となく心を惹かれつゝ戻りました。旅先きです
かり、粗末な紙に、併し心を籠めて「藏居家先祖代々親類縁者の靈」そして自分の
子供の靈、それは流産したしました處の子供に名前をつけまして、そして甘露の法雨
を六時、七時半、九時、と三回だけ誦げとして戴きまして、私は寝たのです。翌日起きて

◎ 實相体験集

(第十一話)

研究資料

アレルギー性疾患が器質的疾患が。大連市白菊町八七。

蔵居 満

私は在滿三十三年。去る昭和十一年二月十四日バルに於きまして胃潰瘍脚氣
肝臓、いづれも相當の重症ではつたり床に倒れましたが奉に當面の症狀は治り
ました。二十数年の激務と不攝生のため身体は弱つてゐました。腰の痛みが何
とも云へない程で初は夜五回程、洗濯の時に盤に漬けた着物を上げますと水が
下に落ちる。あれ程の實にひどい寝汗でした。私は不患議で堪らないのです。
一晩に五回もなのです。み教へを頂きますれば、心の法則でキヤンと判るのであ
りますけれど、その當時は判りないので。寝巻も五枚揃へてをり、痛烈なる腰
の痛みのために盗汗が出来る。朝迄に五回は着替へる。さういふ傷ましい私の
姿でした。色々の病氣は一先輕快の形ですのに、此の腰の痛みと、それから来る
恐ろしい夜半の盗汗が治らない。朝起きて「やしゃれ」と思ふと、又しても暗い
夜が訪れて来る。痛む。痛みのがんじがらみ、の中に身動き出来ない自分を泌
々情けなく思つて毎日暮してゐたのです。色々悩みあつた末に、會社の事務打合
せを兼ね、こちらへお伺ひさして戴いた次第五年間に互る所の苦惱、み教への外に
救われ様はない。み教へを聞いて立ち上りなければならぬ。とう決心しました。私が発
病した昭和十年、九州に居ます知人が「生長の家」誌を送つて呉れたのですが。披見し
て居りまゝでした。何所に藏つたか分らない。併し御本を送らたことだけは記憶してをり
ました。参ります十四日前から初めて「生命の實相」第四巻を読み出したのでありま

◎ 行爲に於ける個性と普遍

(ひかりの語録より)

行爲に於ける個性と普遍は、時計に於て、齒輪の行爲が個性を完全に發揮するほど、全体の時計の生命を完全に生かすと云ふ實例で明かになつたであらうやうに、個性をわざと發揮してやううと思つて突飛な行動をとつたり、わざと奇矯な行ひをして見たりすることが個性を發揮する所以でないことは明かであります。個性とは其の位置におかれたる小生命(大生命に對する)が與へられたる使命であり役割です。齒輪の齒の間隔の精確さや、その一定の廻轉速度などは、これは時計全体の生命の運行の上に齒輪が與へられたる使命であり役割であるが故に、それは個性として尊ばれるのです。だから個性を發揮すると云ふことは、その一個の齒輪が本來設計されてゐる使命の通りに完全に生ると云ふことであります。設計されたる使命以外にのさばり出る「我儘勝手」と云ふことは、この齒輪の譬へを以て云へば、わざと正圓にならずに歪になつて見ることや、不整な一方に片寄つた長短ある齒輪となつて見ることであつて個性を發揮することにならなものです。

そんな不整な出鱈目になつて見ることは、誰でもルーズになりさへすれば、成れることなのであるから、個性を發揮したと云へないのであります。

個性とはその人(又は物)でなければ他のものには出来ないところの特色でなければならぬのです。即ちその人(又は物)が大生命から設計された通りの特色(使命)を發揮するのが個性を發揮すると云ふことなのであります。

××

××

××

××

五月三十日 日光輝く日

ダンテの神曲に「夫れこゝにては慈悲全く死してはじめて敬虔生く、神の審判に向ひて憐れを起す者あらば之より大なる罪人あらんや」と云ふ一節がある。阿部次郎氏はこれを解釋して「柔弱なる同情者は、單に彼等と同類なる故を以て、神の正しき刑罰をも猶かなしむべしと感ずる。これ結局惡に對する左袒である。神の審判に對する抗議である。これが神を讀す者でなくて何であらう。理由なき同情に溺れる者は神を讀す者である——同題のサルジリオの一言は、此くの如き峻嚴極りなきダンテの論理感を最も痛切に素白したものと見て初めて生きて來るのである」と云つてゐる。

生長の家では神罰は説かない、それは神罰と云ふ語によつて恐怖を唆り、恐怖を唆られることによつて、心に不平を描き、神が創造りもしない不幸をわれとわが心に假作して、その中へ墜落し行くことを防ぐためである。そこで神罰は一應否定されてゐるが、神の審判と云ふものは「罰」と云ふやうな形で來るのではなく、あるべきものが、あるべきところへ、あるべきやうに顯れて來るところの「定め」自体を「神の審判」と云ふ語でダンテは云つてゐるのである。即ち、かう云ふ心の人は斯云ふ結果を得ると云ふ心の法則の自律性の展開を云ふのである。「神罰」と云つて「罰」の字を云ふ場合には、他律的に他から強制されて不幸が現はれて來る意味が含まれてゐる。だから神罰はなく心の法則で自律的にさうなると生長の家では云ふ。④自己の内に神を觀たものは恐怖を超えろ。(智慧の言葉)

五月三十日 自己偉大を自覺する日

明るさは凡ゆるものに喜ばれる。招かれなくても明るい人は、光線のやうに何處へ往つても其處で喜ばれる。招かれても暗い人は、何處へ往つても體は嫌はれる。明るい人には常に幸福がつき纏ひ、暗い人には常に不幸がつきまとふ。悪事は更に悪事を生む。善事は更に善事を生む。幸福者とは悪事を末だ犯さなかつた人のことではない。悪事が次に悪事を招ぶのを断ち切ることを出来た人だ。悪事を断ち切る道は、この悪事をしておるのけ本當の「私」でないと知ること。そして本當の「私」でない者に、今日限り断じて加勢しないと決心することにある。

自己辯護をする者は、まだ本當に眞理を求めてゐるものではない。『本當の自己』は常に昭々として輝いてをり、辯護して辛うじてその尊嚴の保たれるやうな卑しい存在ではない。辯護しなければならぬやうな自己己たゞその「辯護」なければ尊嚴が保てぬ』と云ふ理由だけで『本物の自己』でないことを證明してゐる。これほど神の光が輝いてゐるのに不幸と云ふものが何處にあるか。たゞ汝の心が鎖してゐるがために過ぎぬ。

反抗心と云ふものは自己低卑の證據である。反抗心の逆は包容精神である。包容精神は自己偉大の自覺である。少青年に反抗心はありはれ、一概には云へないが、父母には包容精神がありはれてゐる。乞食でも親分となるほどのものは包容精神が大さいので子分から尊敬せられる。

⑥希望は現實の母である。希望に燃よ。希望の火で一切を焼さつくせ。

(智慧の言葉)

五月二十九日

一切の不浄を浄化する日

過去の傷害に就いて思ひ、クヨク煩ふ者は生命を摩り減らす。クヨク思ひ煩ふ暇があるならば未来の光明に就て希望と空想を有つべきである。希望は實現の母。心に描いて待つものは必ず成就する。待つ間に心を掠める「不安」が事を毀すのである。「不安」は蒔いた種子を毎日掘り反して見る働きである。かゝる農夫に培はれる植物は育たない。調和の中に萬物が育つ。大地の一切の不浄を浄化する。一切の汚物を大地の中に委ねるならば大地はその一つをも排斥しないで、それを肥料とし養分として效用に替へて了ふのである。大地の如く何物をも排斥しない心になれ。すべては汝の中に於て育つであらう。富も榮達も健康も幸福も大地の如き心のうちにこそあるのである。

必需物はすべて與へられてある。必需物は一つの事物ではない。一つの事物にのみ執着する者は、自分の人生に流れ入つて来る「神の與へた必需物」を拒むものである。世に肥えることとの出来ない兒童に偏食者と云ふのがある。食膳の上つたものをそのまゝ有難く受入れない。アレコレかの撰擇が多すぎる者である。食膳の食物をすべて有難く辨んで食べる者の胃腸病は治つて肉体が肥えて来るやうに、自分の人生に流れ入つてくる一切の事件を喜んで受け、そのすべてが滋味を吸収し、去り行くコースには執着せず、新に人生の食膳に上り来るものを又新に合掌して受け食する者はつひには人生の豊たる肥満者となるのである。

◎贅澤を減むな。今日一日生されてある事實に感謝せよ。

(智慧の言葉)

五月二十八日 無限財寶集る日

ある巨富の人は彼が貧しき時に次の如く念じたのである。

「おれは貧乏ではないぞ。心で富を招き寄せろのだ。貧乏と云ふ觀念をおれはもう自身の心から驅逐した。自分は神の子だ神は無限供給だから、神の有り給ふ全ては自分に與へられてゐるのだ。自分は今無盡藏の富を與へられてゐるのだ。その自分を貧しいと思つたのは自分の間違であつた。わが欲するものは、すべて今後磁石に吸ひ寄せられるやうに、自分の所へ集つて来るのだ。恐れるとは無い。今現に來つゝあるのだ」

この種の思念は諸君の心を富ますであらう。自分で先づ富み、心を愉快にしてから大いに働くことだ。この種の思念法を私は「人生は心で支配せよ」の本に三十幾通り書いて置いたのである――

欲するものを成就する思念法をもう一つ書いて置かう。毎夜就寢前左の思念を爲して待つが好い。「自もなく他もなく、天地唯一つの祖神の中にある。吾が今求めてゐるのは小さき我の力で求めてゐるのではないのである。天地全体の力で求めてゐるのである。吾れ求むれば天地唯一つの大生命が動き出して與へ給ふ。何故なら吾れは天地唯一つの大生命の子であり、大い生命に一体についてゐるからである。吾が求むるとき、それは既に、われに近づきつゝあるのである。求むるものと求められる物とは一体である。それは宏大無邊の大生命の力によつて引寄せられつゝあるのである。」(生命の實相)

五月二十七日 父母の恩を憶ふ日

毎日齒を磨くごとく、心には良き言葉でブラシを掛けねばならぬ。心に善言美詞のブラシをかけることを忘るれば、遂には齒に垢が着くと同様、心にも垢が着くのである。齒よりも大切な心にブラシをかけないで置くことは不當である。良き書物を讀むことは善き「言葉」で心を磨くことになるのである。絶えず此の新生への旅日記を繰返し讀め。讀んで必ず実行せよ、實踐は力である。而して同じ齒ブラシを長く使つてゐると、摩れ禿びてしまつて齒の垢を落し得ないことがある。それと同じく如何なる良き語録も、あまり同じものを讀みつゞけると感銘がうすれて心が淨まる力減つてくることがある。さう云ふ人のために、私は「日輪めぐる」か「光明道中記」をこの旅日記の副讀本としてお勧めしたいのである。いづれも三百六十五章にわかつて、毎日一章づつで心を磨くやうに出来てゐるのである。「生命の真相」を最初の頁から、一日幾頁と定めて置いてもう一遍讀み直されるのも心を磨く好い方法である。人生の光となつて輝きたいものは大いに自己を磨くことだ。讀書、實踐、微笑、鏡を見る、愛情の微笑、自分を幸福だと思ふこと。自分はいれしい！と常に思ふこと。天が自分をこの世に生んだのは、何事か使命を果さしめんがために生んだのであるから、必ず自分は何事か大業を為し有るものだと信じて前途に希望を抱くこと。併し脚下にある仕事と勉強に誠を竭すこと將來の豊太閤は草履取が草履を大切にすることのなかにあること。

◎生長の家の生活はすべてが與へられた生活であるから、感謝の生活のほけはない。(智慧の言葉)

五月二十六日 表情をよくする日

汝鏡に對ふべし。汝の面を見よ。汝の眉の間の皺を去れ。愛に充ちたる眼光を爲せ。而してそれを注視せよ。『われ愛に充たされたり。わが眼先は愛に満ちたり』と心の中に吟誦せよ。微笑せよ。汝の微笑は一切の敵を天下より消し去るべし。天下は汝のものなればなり。『われは幸福なるものなり。如何なる不幸も來ることなし』と心の中に吟誦せよ。この行事を一日數回つゞくべし。汝は愛深き人となりん。汝は人を信じさせる魅力を得べし。汝の運命は好轉せん。夫婦は仲好くなるべし。疑ふべからず。たゞ信と實踐とに效果は顯るべし。

汝は表情の力を知らざるべからず。表情は運命を左右し、境遇を左右するなり。汝が人から好意を持たれざるは、汝の表情のどこかに暗いところがあるなり。汝の表情のどこかに冷淡なところがあるが故なり。汝の誠實足らざるが故なり。誠實足る者は誠實の表情を有す。愛深きものは愛深き表情を有す。

汝の瞳を見よ。汝は如何なる瞳を有するか。『うれしい』と常に思ふべし。『うれしい』と思ひて鏡に對ふべし。たゞ皮膚を上より塗るためにのみ鏡を見るたけで足りざるなり。『私は幸福だ』と思ひて鏡に對ふべし。幸福者の眼光をせよ。『うれしい』目附をせよ。そして『眞に自分は幸福である』と思ひ込め。實踐せよ。

汝の境遇は汝が心に頻繁に繰返すところのものなり。生長の家の生活は、賞める生き方である。某月の集りで私はあることを賞めた。善い所ばかりを拾ったのである。けれども私に賞められた人は裏切つた人なのである。(智慧の言葉)

五月二十五日 知人に眞理を施す日

病はとらはれより生ず。執はれと執着は利己主義なり。とりはれば「物質あり」と思ふ故生ずるなり。とりはれば「肉體あり」と思ふが故に生ずるなり。執を断滅したる智慧を般若の智慧と云ふ。されば般若心經には、觀世音菩薩が、般若波羅密多の深行を修して五蘊皆空と照見し、眼耳鼻舌身意なしと照見せられしとが書かれてあるなり。般若波羅密多の行とは神觀の行事なり。五蘊皆空とは色受想行識の五つが空なることなり。簡單に謂へば色法（物質）も心法（心）もいづれも空なりと知ることなり。眼耳鼻舌身意無しとけ肉體もなく、肉體の快を逐ひ苦を避ける意もなきことなり。物質もなく、心もなく、肉體もなく、追快避樂の意もなくなれば、天上天下自由自在なり。何ぞ有ると思ふか執着するなり。執着するが故に心一ヶ所に停滯す。心一ヶ所に停滯するが故に、その反映として身体の一ヶ所に血液停滯して新しき血液と交代せざるなり。新しき血液と交代せざるが故に、細胞の活力は弱るなり。細胞の活力弱るが故に、病菌跋扈するなり。

汝の心を病氣より放てよ。病氣は自然療能博士の内部的作用と、医師の外部よりの補助的自然療能誘導法の勘能なるにまかせよ。而して汝自身は病氣より心を放つなり。心に描くが故に形にあらはれるなり。西田哲學は「形あるものはすべて形なきもの、影なり」と論じて文化勳章を得たるに非ずや。それを實踐にまで活用したるが谷口哲學なり、生長の家なり。

五月二十四日 鏡を見て慎しむ日

他を害せんと思へば、自己は必ず害せらるゝなり。鏡を擲れば自己の手が傷くなり。不平を思へば、愈と不平なること汝に近づかん。悲しみを思ふべからず。悲しみを思へば愈と悲しきこと汝に近づかん。憂ふれば憂ひ近づき、憎めば憎み近づかん。泣き面に蜂とはよくも云ひたるかな。實に逆面をつくれば、悲しきこと集り來りて汝を螫さん。類は類を招ふなり。天理教では「因縁寄て守護する」と云ふなり。

家族は自己の鏡なり。良人善して妻のみ悪しき理あるべからず。妻よくして良人のみ悪き理あるべからず。との眞理を逆用して、相手が悪いから、私しにそれが映つて私が悪くなるのだと云ふべからず。相手が悪のは自分にまだどこが悪いところが残つてゐるのだと思ひ反省すべし。

家族に病人あらば、自己の心にまだ不完全あるがためなりと思ひて、自己を反省して相手を咎むべからず。三界は自心の展開なれば、自己反省と自己改造が徹底すれば相手もよくなるなり。妻病めば良人反省すべし。

良人病めば妻反省すべし。親病めば子反省すべし。子病めば親反省すべし。家長病は家の子郎黨悉く反省すべし。

家族全部を神の子なりと思ひて拝むべし。拜めば神の子の美しき姿が生れ出づるなり。◎家庭の葛藤は、執着の愛から起る。舅姑と姪同士の夫婦親子間の紛争は、すべて自分が斯うしてやつたのに」と云ふ「我」の愛から起るのである。(智慧の言葉)

五月二十三日 親へ孝養を盡す日

世は鏡なり、一切は自心の展開なり。心豊かなれば、萬物が豊かに集まるなり。心貧しければ萬物が乏しくなるなり。心圓になれば周圍に集る事物圓滿なり。心峻しければ周圍に集る事物峻しきなり。自己の心を光らして自己を傷つくと勿れ。

世は鏡なり、鏡があるがために心淨まるなり。硝子の鏡に對してはわが顔貌を淨め、身だしなみを慎しむなり。世の鏡に對しては自己の行を慎しむなり。

周圍を見るととき自己の心が判るなり。自己の心が判るが故に有りがたきなり。常に健康を思ふべし。苟も病を思ふことなけれ。若し自分が病ひに非ざるやと取越苦勞することなけれ。常にわれ健康なりと思ふべし。常に吾れ若くして元氣洩刺なりと思ふべし。思ふ通りに人生は成るなり。過つて吾れ老いたりと思へば老衰するなり。年齢に捉へらるゝこと勿れ。

自己が変れば、世界が変るなり。鏡に面して笑ふと同じきなり。今までの虚面を捨てよ。自己の環境が辛く苦きものならば、自己になは辛く苦き心が存するなり。省みて辛く苦き心を捨てよ。自己が變れば世界が變るなり。

汝の親辛きか。汝の親辛に非ず、汝の心辛きなり。親に對する汝の愛情少なきなり。考養少なきなり。汝の子辛きか。汝の子辛きに非ず、汝の心辛きなり。

親子夫婦互に合せ鏡なり。

◎夫婦家族は、因縁によつて、互ひに、魂を磨き合はために集つてゐるのである(智慧)

五月二十一日 心の花の種子を蒔く日

愛と深切とは人生の花園の美化なり。愛と深切なくば、人生は荒涼たる氷山なり、落漠たる沙漠なり。われ愛なく深切なくして生活するに堪へんや。花を咲かすはわれ自身にあり。他を羨むべからず。他には他の人生の花園あり。われには吾れの人生の花園を興へられたり。われわが人生に花の種子を蒔かんかな。

花の種子は「愛語」なり、「讚嘆」なり、「深切」なり、「いたはり」なり、「思ひやり」なり。雑草の種は「憎み」なり、「恨み」なり、「不誠實」なり、「罵詈雑言」なり。「讒謔」なり、「冷酷」なり、「無情」なり、「尖つて表情」なり。

雑草の種子は花の種子よりも繁茂しやすきなり。たゆまず雑草を刈りとることはよつてのみ、花の種子は芽を吹き枝を伸ばし、花を開くことを得るなり。何故天は雑草が繁茂しやすく、花の種子が途中枯れ易く創造したまひしか。人生には努力が必要なればなり、努力なくして花の種子が逕ましく芽を吹き花を開かば、人間は努力せざる懶惰者となるべし。人生の美果は人間の努力によつてのみ築かるなり。天は斯くて地上に雑草の種子とを興へたまひき。しかしていつれを蒔き、いつれを繁茂せしむべきかに就ての自由を興へ給ひしなり。努力して贏ち得る牛園と、たい貰ひしアブク銭の牛園とは、その価値に雲泥の差あり。

◎ 天地に感謝せよ。萬物が皆有りがたい。おのづから合掌される。(智慧の言葉)

◎ 人間の愛が自然界に及ぼす影響を知つてゐる人は少い。人間の心は萬物を支配する。その時は植物は今より一層美しき花を開き、萬物は皆人間の支配となる。(實相書)

五月二十日 易々加減の習慣を止める日

道徳は理論に非ず、實踐なり。百の論議も一つの實踐に若かざるなり。何事にも深切を盡也。人に物に、事に、如何なるものに臨んでも、易々加減になすべからず。易々加減は『好い加減』にあらず、易々加減は自己を安價に見積り、相手を安價に見積り、事を、物を、安價に見積ることなり。自己侮辱なり、他人侮辱なり、一切の物事に對する侮辱なり。一切の人、一切の物、一切の事を侮辱すれば報いけ必ず自分に來るなり。善人と見えても『易々加減』の性質あるがために幸福になれぬ人あり、物事に失敗する人あり、災難を受ける人あり、人から喰はれる人あり。是れ『易加減』の生活習慣より來るなり。毅然として蹶起し、かゝる生活習慣を擲つこそ男子の本懷なりや、大和撫子の全誠ならずや。何事にも深切の愛を持たざるべからず。『居候四角な部屋を丸く掃き』と云ふ川柳は、何事をも易易加減に誤摩化して、深切なりざる者は、つゝに零落して『居候』となるべき事を道破したるなり。草履取藤吉郎は、草履に對しても深切なる愛を把握したるなり。空想的に概念的に草履を愛したるには非ず。眞に懷ろに入れて温め、君公の脚下を温かならしめたるなり。この思ひ遣りの深切なる。これを深切と云ふなり。深切にすればするほど自己の魂は高まり、みとから愛され、自己の地位も昂まるなり。晩年の豊太閤、既に草履取の中にあり。◎すべて『惡』は迷ひの世界の產物であるから、神を生かし、愛を生かし、實相智を生かす限りに於て『惡』は起り得ない。

五月二十日

小善人性を克服する日

私の心内にある聖人振った「小善人性」はまだ充分克服せられてゐるとは云ふことは出来ない。終身誌友に加入して貰ひたいために、講習生が及びがりの発意によつて私に贈り物しようとする数百圓を辞退して「さう云ふ私有財産になる贈り物は要めかり、公共の方の終身誌友に入つて下さい」と三月の本部講習會で云つたのは寧ろ美點ではなくして、私の缺點なのである。まだ「金を集める」と云ふことに對する氣兼ね、人が誤解しやすいかと云ふ小心翼々たるところや、とりも、自分でも嫌になる位の小ささである。自分は斯の如き小心翼々性と「小善人性」とを克服しなければならぬのである。

わたしの行くところに道がひらかれる、私は道である。わたしの行くところに花葩が撒かれる、私は花葩である。わたしの行くところに太陽が照り輝く、私は太陽である。わたしの行くところに必ず寶庫がひらかれる、私は寶庫である。この世の中が思ふやうに行かないと云ふ人は、私と同じ心持になるが好い。嘆しきは平かにせられ、難さは易しきに打ちかへられる。

人が何とおん身を批評しようとも、おん身は毅然として眞理と共に立たねばならぬ。おん身は眞理が一切のよろこびの源泉であることを知らねばならぬ。一等悪いことは眼先の他の批評に促へられて、眞理の永遠の評價の前で無價値になつて了ふことである。

◎人間の腦みのもとは皆な徳から來るのである。徳は迷ひから來るのである。(智恵)

五月十九日 自分は濁つても他を救ふ日

私の『超宗敎を建つるまで』及び『新佛敎の発見』を読んで下さつた人なら誰でも知つてゐる筈である。私は孤高みづから聖き聖者の世界にゐるつもりでゐながら、人をも救ふことが出来ず、みづからさへも救ふことが出来ずその「聖」とはたゞ心の世界に於て反覆自演するに過ぎない觀念の「聖」であつたのである。みづから善人と自認しながら、誰をも救ふことが出来ないうでマケラスの土牢で、間もなく自分自身が受くべき死刑を待つてゐる洗禮ヨハネを、私は私の戯曲『耶穌傳』で「これを善中の悪と云ひます」と悪魔をして嘲笑せしめてある。まさしくそれは「善中の悪」なのである。悪魔はかくの如くして善に捉はれたる愚かなる善人を手も足も出ないやうにしてゐるのである。私の孤高を好む性質は此の私の内部の中に於ける「善中の悪」を克服して、清濁併せ飲むところの大海の如き、清濁併せ照りすところの太陽の如き心と生命とを實現せんととにあつたのである。私の三部作『神を審判く』『耶穌傳』『釋迦と維摩』（單行本釋迦維摩聖錄に收録）は此の狭き善人の心が、その心内の「善中の悪」を克して、遂に世を救ふために魔女を自分の手先にして自在に驅使する維摩居士の生涯を描かんとしたものである。小き善人にして、維摩居士につまづかざるものは幸ひである。「生命の實相」は無論のこと、私のありゆる書きものは此の自在を失つた「小善人」を克服して大自在の「超人」たちしめんがための自己の魂の歴史を物語るものだとも云ふことが出来るのである。

五月十八日 市に聖を隠す日

『生長の家』そのもののためなり、孤高みづから聖とし、天空に昇華してしまつて姿を見せないやうに聖まり切つて了ふことの方がどんなに氣持のよいことであらう。また自分自身が聖く高きと云ふ譽れを得るためなり、自分の財産に乏ちない宗教結社『生長の家』の外的容積が大きくなるために終身誌友などを募集する必要は少しもないのである。『形が大きく信者の数が多くなつたとて何になるか。生長の家はその純粹性なところが價值があるのではないか』と云ふ一誌友の主張は、それみづからに於て眞理ではあるであらう。しかし、『形が大きく信者』が多く、基本資産がしつかりしてゐるが故に、(その教義が生長の家に比較して尙一層〇〇に合致すると云ふ理由に於てはなく)天理教も眞宗も、宗教團體法によつて文部省が認可したのである。そして生長の家はまだ、宗教結社として放置されてゐるのである。と、云ふ内容よりも外形の龐大を尊ぶところの官廳的な習慣は、あまり尊いことではないけれども、併し吾々の住んでゐる世界と、諸君の住んでゐる世界とはさう云ふ世界であると云ふ現實認識の下に、さう云ふ世界に住んでゐる衆生をより多く惹き着けて救ふためには『生長の家』も外形の整備も必要であり、宗教團體としての資格を整へるための基本資産の整備も必要なのである。世間のうちに生長の家をインキヤ視してゐる者がある事は、多勢の人を救ふための邪魔になる。その邪魔のものを取除くために形を整備を必要とするのである。

五月十七日 型をやぶる日

吾々は講習料に値段附をするのは「繪」を賣るのと異つて、「自分」や「自分の講習」を賣りつけるためではない。それは相手を救ふためなのである。相手の機根に應じて、それを惹き着けるために「理想の高所から」相手相應の低所まで降りて行かなければ相手を救ふことは出来ないのである。「時には姪女とあらはれて色好む者を誘ふ」のが眞に悟れる大聖である。維摩經には書いてある。「小聖は山に隠れ、大聖は市に隠る」である。無料で講義してゐて人が集まらないうやうな愚かなる無方便は、自分は清く隠れてゐるところの小聖の境地に過ぎない。大聖は、人から批難を受けながら、自分を汚し汚し、しながらでも、泥の中へ降りて来て他を救ふのである。自分が淨まりうとするのは、まだ菩薩の境地ではない。「先度他」即ち、先に他を渡してから最後に自分が聖まるのが菩薩なのである。

終身誌友を募集したり、色々その人相應に觀えると見えて、色々の批評が来たが、大抵智慧方便を忘れてしまつて、「先度他」の道を知らない人の批評である。「財産の點では天理教や眞宗が一番多いだろうが、ないよりは却つて腐敗してゐるではないか。生長の家も内容を汚して外形を大きくするつもりか」と云ふやうな鋭い批評も來てゐる。生長の家の内容は「眞理」そのものである。外觀の巨大は方便に要るのである。「巨きな外觀を作るまい」と固く固まることも一つの空執である。

五月十六日 家族に現實に感謝する日

自己の住む天地を快きものたりしめんと欲せば、周圍に善き言葉の雨めを降し讃めたゝへよすべての人々に、天地すべての物に感謝せよ。天地一切のものに感謝したとき、天地一切のものは皆我が味方である。愛は愛を招び、感謝は感謝を招ぶ。

天地一切のものに感謝せよ、と云へば、脚下を忘れて、概念的に天地に對して漠然として感謝することだと思つてゐるものもあれども不可なり。「天地一切のものに感謝せよ」とは先づ汝却下に汝の眼前に具體的にあるものに感謝することとなりトルストイの如く「人類を愛する」と空想的概念的に愛しながら、却下眼前の妻に感謝し得ざりしが如きは、人類愛の机上的遊戲に過ぎず。「天地一切のものに感謝せよ」とは脚下眼前に汝の良人に感謝することなり。汝の妻に感謝するとなり汝のみに感謝することなり。汝の召使ひに感謝することなり。感謝すれば食事は美味きなり。食物を生み出したる天地の恵みに感謝せよ。料理せる人に感謝せよ。食卓に感謝せよ。食物に感謝せよ。同じ食卓に坐せる人々に感謝せよ。感謝して食すれば、すべての榮養悉く吸収されて胃腸病は治るなり。腹立つときに食すべからず。腹立つときに唾液に毒素生ずるなり。斯く云へば、常に腹立てる人は食する時期なかるべし。「腹立つときに食すべからず」は消極的なり。決して腹立たぬ人になるべきなり。そして感謝して食すべし。

五月十五日 ものゝ絶対價値を知る日

今井 先生が臺灣にゐられた頃、新聞經營の本業の傍らに、易筮によつて、吉凶の判断をされたら、不思議に的中するので門前雜閑して行列をすると云ふやうな有様であつたさうである。その時の易筮料は一金一圓也であつた。毎日机の抽斗を開いて見ると、その抽斗が殆ど動かなくなるばかりに一圓紙幣がギツシリ入つてゐるのであつた。その頃、持前の物慾に恬淡な心持で今井樸軒先生は考へられた。「こんな事で金を儲けるのは怪しからぬ。自分は別に易筮をしなくとも、他がう生活費は得られるのである。今後は無料で易を觀であげよう」それ以來、今井先生の易筮料は無料になつたのである。無料では行き難いと云ふので段々人から來なくなつた。しまひには誰も來なくなつた。それぞ今井先生の易筮は幕を閉じたのである。

若し、私の本が無料で頒布されたり誰も讀まなくなるであらう。若し、私の講演が常に無料であつたら、餘興に映画の一齣でも添へなければ誰も聴きに來ななくなるであらう。「善」に促されて足を踏み外すものは、自分自身をすら救ふ得なくなるものなのである。何回も講習會を受講する者は、講習料を半額にし、三分の一にし、受講の回数に従つて受講料を低下しなければ可かめ——と云ふ人もある。私の講演は眞理を語るものであるから貨幣價值段を超越してゐる。無料でも安いことはいし、一萬圓でも高いことはいし。

◎物質から生命は 生れない。生命を生むものは生命のみである。

五月十四日 方便自在の日

青年會主催の大隈講堂でやつた私の講演會は、天氣であつたのに聴衆は階下が三分の二埋まつて、二階三階はかうあきであつた。その席に有名な人々を招待したのであつたが、その後間もなく共立講堂で私の講演會があつた。雨が降つてゐるに拘けらず階上階下立錫の餘地がなかつた。恐らく四千人以上は入つたであらうと思はれた。その時招待された人々は「先日の講演會にはあんなに人が少かつたのに、今度はこんなに満員ですわえ。急にあれ以來発展したものですわえ」と云はれた。一ヶ月ほどのうちにそんなに発展したのではない。大隈講堂での講演會では主催が青年會であるから、正直で廉潔で、入場料をとるのを遠慮して無料であつたのである。正直で廉潔は大変好いけれども「無料のものには値打がない」と人は馬鹿にして聴きに來ないのである。あとから聴いて見ると、共立講堂での講演會には會場整理費を二十錢徴収したのでそれである。「二十錢でも要るのなら少しは恒打のあらものを聴かせるのだらう」と思つて立錫の餘地なきまでに集つたのである。その一ヶ月ほど後に、再び共立講堂で私の講演があつた。今度は階下はつまつてゐたが、二階は半分空席があり、三階は全然から明きであつた。私はあとで係りの人に聴いて見たら、「主催が青年會なので、遠慮して入場整理費を十錢に致しました。」と答へたのである。無料だと最も入場者が少なく、十錢でもとればその程度の入場者があり、二十錢とすれば更にその倍程の入場者が得られたのである。

五月十三日

「善」にも執せざる日

人間を救ふのには、色々の方便が要るものなのである。自分の一家見だけを

「善」だと思つて、その一家見に合ないものを皆「悪」であるかの如く、捉りけ

れてゐる小善人にも困り者である。「生半の實相」の到る處に「善」に捉はれるな

「わばならぬを解放するのが生長の家だ」「善」も執したる悪になる」と云ふこと

が書かれてゐる。多数の人間を救ふ色々の方便を見て、その方便の奥底にある

「愛」と「智慧」とを見ないものは咒はれたるかな。

無料では眞理を聴くために人の集りが少くて、有料なり眞理を聴く爲に澤山

集つて来るなり、大いに料金をとつて人を集めて眞理を説いた方が、それが人を

救ふ方便なのである。何でも無料にするのが人を救ふ道だと考へるのは、形の

「善」に執して本當の善を行じ得ないものである。抵物價が國民を救ふと思つて低

物價政策に執してゐると、段々生産擴充が出来にくくなり、今度は「適正價格

の標語に代り、最近には重點主義で、絶対必需品の生産には相當値上を許せず

と云ふ政府の方針に變つて來たのも、「安價」なばかりが「善」でないことが判つ

て來た一例である。

無料で喜ばない人には、大いに料金をとつて喜ばし、料金を支拂ふ財力のな

い人には無料でも聴講せしめるか好い。同一の私の講義を常には無料で、時

には有料で聴かせるのもその爲めである。

◎自分を標準にして人の善悪をきめる、この心を捨てない限り人の心に平和は來ない

五月十二日 自由自在を得る日

物質を遠離し、肉体を遠離したり、そこに人格の價值感を生じ、たましいの價值感を生ずる——應はその通りである。このことが他に對して逆に強制せられる時、それは「自己の物を放つまい」とする卑怯な自己辯解となり、又他のものを價を拂はずに奪はうとすることになるのである。毎朝、無代で講義し、無代で人生相談に答へてゐると「あの人が眞理を與へるのは無が當り前だ」と考へ出す。「生命の實相」の中にも、或る奇特な看護婦が若干圓の金を貯蓄して、それを〇〇の貧民窟の施與に往つたら最初は感謝して貧民はそれを貰つてゐたが、度重なると、その看護婦の持物を先を争つて奪ふとらうとして、彼女を袋叩きに會はせて追ひ返したと云ふ實話かかいてある。

私が毎朝講義をしてゐる「眞理」も、それが無料公開であるが故に、無料で聴くのが當然の權利であると思つてゐる人がある。そして終ひには、「朝の講義は無代であるのに講習の會費は高過る、無料で聴かせよ」と云ふ人さへも出来るのである。無料は、私の方が「物」への執着を放つので、私自身が氣持がよいのであるが、受取る人の方は、無料受けたら氣持が悪いのである。無料受たら氣持が悪い證據に、無料の朝の講義には百五十人か二百人しか集らないが、松幾園も講習料をとると、佛ふとが氣持がよいから七百人、八百人と聴講者があるのである。

五月十一日

神のために働く日

何故「人格」は「本當にあるもの」なのであろうか。何故「人格」は「價值」なのであろうか。それは「本當にあるもの」であるからであることは既に述べた。

次に起るのは「本當にあるもの」とは一体何であるかと云ふ疑問である。「本當にあるもの」とは「神」のみである。「神」は絶対實在即ち「本當にあるもの」である。果して然らば、人格は價值がある價值は「本當にあるもの」にのみある。而して「本當にあるもの」は神のみである。この連續せる命題が正しいならば——斯るが故に、人格

とは「人に宿る神」であると結論し得るのである。

人間に神が宿つてゐる」と云ふのは、斯う云ふ方面からも理解し得るのである。一切の價值は、唯「神」のみから來るのである。無價值とは、「神」が其處にいないことである。神なき行為が無價值であり、神ある行為が價值ある行為であり、神なき事物が無價值であり、神ある事物が有價值の事物である。神を行為にありはすこと。神を事物にありけすこと。神をありけしとへすれば、神は價值であるから、其處に貨幣價值や財貨價值も生ずる。貨幣價值や、財貨價值は本當の價值の影であるからである。

◎ 奉仕とは新價值の創造である。新價值の創造のほかに奉仕はない。(智恵)

五月十日 眞理を人に傳ふる日

何故、吾らは斯くの如く、人格をば「本來汚れなきもの」と自覺するの
であらうか。何故、吾らは人格をば肉体よりも尊きものと自覺するのだらう
か。それけ、肉体とは「本來無きもの」と知つてゐるからである。それけ「
人格」とそ本當に在るもの（實在）と知つてゐるからである。

凡そ價値自覺（おぼえ）と云ふものは「無いもの」には感じられないで「實在
にのみ感じられるもの」なのである。「無いもの」は本來無價値で「有るもの」
のみ價値があるからである。「無いもの」に執着するとき、その執着の度に從
つて、その價値自覺は單に「無」とか「零」とか以下に無價値に感じられて
くる。それは價値のマイナスとして感じられて来るのである。價値のマイナ
スの自覺とは「穢ない」とか「下劣」とか「低卑」の感じかである。さう云
ふ意味に於ては「物質」や「肉体」を捨てる程度に從つて、「下劣」とか「低
劣」とかの感じは消え、「清まつた價値」の感じが出て来る。

價値自覺は「それが有る」と云ふことに出發するとすれば、（無いものけ價
値がない）物質や肉体を捨てる程度に從つて「價値」の自覺が得られるとする
ならば、これは逆に「物質」の無、「肉体」の無を證明したことになるので
ある。そして「人格」を生きたとき、價値の感じが得られ、生き甲斐が感じ
られるとすれば「人格」とそ「本當」にあるものであることを内面の價値感
から證明してゐることになる。

五月九日 我が人格の尊嚴を自覺する日

眞に自分の愛が淨まつたものとなるためには、物質を標準として、又は肉体を單位として、物質を與へたり肉体の樂をさせてやつたりして相手を幸福にする以上のものでなければならぬ。相手を「物質」ではないと尊敬し、相手を肉体ではないと敬禮し、しかして相手を愛するためには、眞に「靈」を敬する如き態度にて相手に接しなければならぬのである。物質や肉体に媚ると云ふことを「愛」であると誤解してはならぬ。眞の愛は、彼に「肉体を殺す道」「肉体を献る道」を教へる愛でなければならぬのである。肉体を公けのために滅したとき、何故吾等は勝者としての自覺を得るのか。

それは本當の人間は決して肉体ではないからである。

人間は「肉体に墨が附いてゐる」と云はれても決して憤激しない。「よく敬へて下さいました」と云つて御禮を云ふ位のものである。それなのに人間は「あなたの人格は汚れてゐる」と云はれば憤激する。それは何故であらうか。それは「肉体とは本來汚れてゐるもの」であるとの自覺があるからである。本來汚れてゐるものとの自覺をもつてゐるものを「汚れてゐる」と指摘されてゐる。また「苦痛を感じないけれども」「本來汚れてゐない」との自覺のある人格を「汚れてゐる」と指摘されたり、その自覺との上に或る矛盾を感じるが故にこそ憤激を感じるのである。

◎性慾は愛ではない。性慾は肉体に屬するもので、愛は靈に屬するものである（智恵

五月八日 もつと光を興へる日

ゲーテはその臨終に「もつと光を！」の一語を遺したさうであるが、よい仕事には光線が必要である。心の光とはよろこびである。従業員を悦ばさないでゐて産業能率を挙げようと思つても効果があがるものではない。

子供を悦ばさないでゐて叱るばかりで「勉強せよ」と責めたてるばかりで勉強の成績があがるものではない。よい仕事と、よい勉強とは「もつと光」が必要である。樹木が美味しい果物を作り上げるのにも暖國の温かい光が豊富に必要ではないか。子供をよくするにも「もつと光」が必要である。坊やは良い子だね。坊やが斯んな良いことしてくれて、良い子ねえ。

有難うよ。お父さん、お母さんは嬉しいよ。……このやうな讃め言葉と感謝とを、子供に對して毎日忘れること勿れ。草花を一つ咲かせるにも毎日如露で水を澆ぐ。まして人間の子を育てるのに善き言葉を澆がないと

とがありうか。小言と逆き言とブツ／＼と不平とを家庭から驅逐せよ。感謝と讃嘆と和顔と愛語と善き言葉と明るい心と——斯う云ふ肥料を汝の愛する家庭の花園に澆ぎかけよ。園藝家が花をつくるにも、毎日手入を怠りないのに、家庭に美花を咲かせ、美果を實のらせようと思ふ者が家庭の手入を怠るのは手ぬかりである。

店にも社にも、工場にも、その通りだ。それらに明るい雰圍氣を充滿せしめよ。①すべてを讃へよ。讃嘆の聲で雨り也。

(智名の言)

五月七日

實踐 第一の日

食事のときに、先づ「これは大変美味しきうだね」と云ふべし。美味し
さうに見えずとも斯く云ふべし。美味しくなるなり。少くとも楽しくなる
なり。楽しくなれば、楽しくない時よりも美味しきなり。ついで「これ
は大変美味しい」と一口味ひて云へ。調理した人に對する感謝の表示なり。
雨降りでも、曇天でも、人に逢つたり「グッド・モーニング」(好い朝)「グ
ッドデー」(好い日)と云ふ外人の習慣は甚だ結構なり。日々是好日は禪
宗人の標語なり。「日」の用好日にして、食物は「非好日」なりんには何の
甲斐があるん。小言は家庭を暗くし、事務所を暗くし、その能率を低下せ
ん。小言の代りに感謝せよ。美點を見て褒めよ。信頼を表現也よ。若缺點
あらば、美點を十ほど擧げて心を悦ばせ置きてから「もう少しこゝを斯う
してくれ、ば、その美點が一層引立つ」とか「ここ一つでもう完璧だ」と
云ふやうな注意を與へよ。

明るいレンズのカメラは、暗いところでも光を吸収してよく物が寫るの
である。さう云ふレンズは上等のレンズである。汝の魂を上等のレンズた
らめよ。コンタツクスのレンズだらめよ。どんな暗いところでも光を
見出すレンズだらめよ。然らば汝は暗中に於ても光明を見ん。暗中
に於ても光を見出す魂こそ、高級の魂と云ひ得るなり。汝の魂のレン
ズを明るいレンズだらめよ。外の暗きを眩く事勿れ。光りは光を招き暗は暗招

五月六日

棘も棘ならずと知る日

美點を見ろ人にのみ美しき世界はひらかれる。この事は永劫に渝ることなき眞理である。美しき薔薇の花にも棘がある。その棘のみを見て薔薇の花の美しさを讃美し得ないものは、みづからエデンの樂園から逃げ出すものである。り、さう云ふ人には天國はひらかれないのである。

薔薇の棘は、實はその美しい花を保護するために神が造つたところの必要な棘であると云ふことを知るものは幸いである。薔薇は棘があるので、幼弱のときは他の生き者から觸れられずにその蕾が生長して美しき花を開くのである。それと同じやうに、偉大の缺點と見えるところのものは、その偉大なりしめるために必要であつたとこの環境や生活習慣から來たものである。缺點と見えるものは、偉大への準備であることがあり得る。多くの人は不幸に陥ることによつて、人格を完成したり、不屈の勇氣を完成したり、樂々と生活して來たならば到底今ほど偉大になることが出來なかつたやうな困難を切り抜けて來たのである。そのために其人の性格に印せられてゐる暗い影が尙残つてゐるにしても、それは「缺點」と謂ふべきではなくて、それは寧ろ薔薇の美しい花の蕾に尙棘が残つてゐるやうなものである。その棘のある蕾は幼弱な蕾の花辦を保護するための棘であつたのである。美しい花を見て悦ぶ人はまだその蕾に残つてゐる棘を奪はねばなりぬい。

◎栗のイガが幼弱な栗の實の防壁であり、形式は完全に生長までの防壁である。

五月五日

他の美點のみを見る日

何故吾々は素直に偉大なる者を仰ぎ瞻て、それを偉大として尊敬し得ず、
々をつけたくするであらうか。それは自分自身が到底その高さまで登り得な
いと云ふ自己劣等感から来るのである。貧民が富豪の缺點をあげばきプロシタ
リやカブルジオアを攻撃し、更に進んでは左翼理論家が舊秩序の階級を打倒
せんとし、傳統を攻撃し、つゝには無政府主義に逆もならうとするのは、自己が
高く上がるよりも相手を打倒したならば、自分は揚る努力なしに同じ高さに
高く揚がつたと同様々々とした展望が得られれると思ふからなのであ
る。さう云ふ人の「自分が偉くならつた」と云ふ感じは、實は「自分そのものの
絶對的偉大さ」ではなくして、相對上自分が高く見えたり好いのであるから、
隨分自己の眞價を自己で馬鹿にしたやうな愚かなことである。他との相對上、
自分が立派に見えたり好いと云ふやうなことは、硝子製の履みダイヤモンドを薄
暗いランプの下で本物に見えれば好いと云ふやうな淺基を考へ方である。そのた
めには相手の光が薄暗いほど好いのである。それは「自分は到底本物の寶石
には成れない」と云ふ自己侮蔑のしるしであり、自分の二セ物が本物らしく
輝いてゐる爲にはあらゆる本物に々々を附けたい考へ方である。さうした人
間が多いほど、此の世の中は進歩しない。どんな偉大な人間にも、無理に探
して缺點を指摘し、それを揚足取的に攻撃してやらうと思へばどんな聖
者にも暗い影と見まがふ或る點はあるのである。

五月四日 心愈に淨まる日

わが心の王國を支配せしめ、素質も体質も怖るべきものに非ざるなり。
病箇は、心で先づ打撃を受け、弱つてゐる機官にのみ繁殖するなり、みづ
からの心を大切にせよ。みづからの心を汚すこと勿れ。みづからの心を傷
つくることなかれ。身体髪膚これ父母に享く、これを毀傷せざるは孝の始な
り。身体髪膚よりもなほ大切なる父母の遺産あり、是れ「心」なり。心を
大切にせよ。心を汚すなかれ。心を傷くるなかれ。常に平和であれ。常に
悲觀的の事を考ふること勿れ。常に樂觀的の事とのみを考へよ。三界は唯
心の所現なり。汝の考ふる如くその如く、汝の住む世界はなるな
り。つねに咄くことなかれ、咄く者には咄くやうな不幸が来るなり。つ
ねに不平を持つこと勿れ。不平を持つものは不平を持つやうな境遇になる
なり。人から憐れまれようと思ふこと勿れ。憐れまれるやうな運命にまで
墮落せん。自己憐憫は、自己破壊なり。「咄き」は自己破壊なり。「悲し
み」は自己破壊なり。「不平」は自己破壊なり、「憎み」は自己破壊なり、
「他に悪きこと起れ」と願ふは自己破壊なり。何ぞ自己破壊して死んで行
く人の多きや。その反對をなせ。恐らくは汝生くべし。自他は一体なり。
人によき事起れと願ふべし。必ず汝によき事起らん。夢々疑ふこと勿れ。
④苦痛を不幸だと思ふのは、肉体心のあやまりである。苦痛がたましいの生長に
どんなに必要かと、云ふことを知る者は苦痛でも喜べる。(智慧の言葉)

五月三日

誰も憎む人の無き日

他を喜ばさうと云ふ考へは自分を健康にし、他を貶さうと云ふ考へは自分を不健康に導く。憎みは更に不可なり。病める人々よ顧みて今を憎み人々と和解せよ。一つの憎みの念を放送すれば、その「憎みの念」は十の子供を伴れて汝にまで歸つてくるであらう。「憎み」の具象化が病氣なるなり。「彼が憎むから私も憎む」と云ふのは不合理なり、矛盾なり。「憎み」を憎むならば、みづから「憎み」を捨てざるべからず。自己が「憎む」と云ふ行為を敢てしなから、他の「憎み」を攻撃する權威は生ぜざるなり。汝の敵を救せよ、七とびを七十倍に救せよ。これキリストの語なり。憎む者は憎みによつて滅び——これ千古不磨の真理なり。憎む者は、その生命の胸狭し。吾れは心の胸廓大なるものと成めざるべからず。心の胸廓大となれば自然胸の血のめぐりもよく、肺病も治るなり。心の胸の狭き善人が肺病になり易きなり。「救さざる」は狭量にして、「救す」は寛量なり。寛量は狭量よりも偉大なるは當然なり。汝をほそれにて他を憎むか、みづから狭量よりの罪に陥り、みづからの運命を傷けんとするか。自からの魂を傷んとするか。憎みの征矢は先づ自分を刺し貫いてから、相手を傷けるなり。自己を傷けずして相手を傷け得る事なし。一切萬事、吾れより出で、吾れに還る。自己より出でざるものは自己に來たらす。

五月二日 弱き者に深切する日

石川貞子さんが「世の中に嫉妬と云ふものがなければどんなに此の世が住みよいでせうね」とわたしに語りれたことがある。あはれなるものに同情し得る人は澤山あるが、高貴なる者の高貴をそのまま讃稱し得る素直な人は世の中に少いのである。そればかりかと云ふと、人間の自他一体の實相を忘れてしまふ方である。高津榮三郎さんが私に「弱者に同情する者は、その實自分が利己主義なのだ。相手を可哀相なと思ふ得るのは、自分がさう云ふ境遇に落ちたり人から同情されたいと思ふ其の自分の可哀相がられたい思ふを、相手に映し出して、あ、あの人は可哀相だと思ふのだ。だから弱者に同情する者は利己主義者だ」と云けたことがある。これは或る意味に於て正しいのである。自分がどんな境遇に落ちても、自分自身をみじめだと思ひ得ないやうな眞の強者は、他人がどんな境遇に落ちても、彼をみじめだと思ひ得ない、従つて可哀相だと同情し得ないのである。尤も弱者愛の心の中には、弱者も同じ人間であるが、あんな氣の毒な境遇に置いておくのは可哀相だと云ふ、引上げてあげたい向上の心もある。相手の中に自分と同じき憐れな相を見出して同情するのも、相手の憐れな状態を隣れにも感じないのも、いづれも自他一体、一即多、多即一の反影である。あはれなる状態から伸び上つて、その状態を克服し得た者のみが憐れなる状態から救ひ得る。

五月一日

附近清掃の日

何でも利害關係ばかりで、物を観る人は氣の毒な人である。利害と云ふのは相對的立場から觀るので、ものそのものの、絶對的立場から觀るのではない。従つてもの、本當の相は把むことは出来ないものである。吾々は何事でも、もつと離れた態度で觀る修養をしなければならぬのである。花は何の爲に咲いてゐるか、花はたゞ咲いてゐるのである。それは昆虫を招んで或る肉慾的な慾望を満足せしめんがために咲いてゐるのであるとか、或る功利的な目的を達せんがために咲いてゐるとか、考へて觀る人があるやうには、その觀る人自身が肉慾的な人であり、功利的な人であるに過ぎない。斯く觀られたる花は花そのものの、本當の姿でけなく、斯く觀るところの其の人の心の内の姿なのである。

花はたゞ生命が咲いてゐるのである。たゞあるが儘である。複雑な考へから自分を犠牲にして咲いてゐる譯でもなければ、また花粉を昆虫に媒介して貰つて功利的又は生殖的目的を遂げることを意圖して咲いてゐる譯でもない。花はたゞ咲いてゐるのである。たゞ咲いてゐるとき生命は自然の経程から昆虫も來り、交配も出來、子孫の繁昌も出來るのである。音楽家が音楽を制作し、彈奏し、文學者が文學を創作し、詩歌を創作し、宗教家や哲學者が眞理を説き、道を傳へるのも、たゞ斯くあるべきものが斯くあるのである。

者のもとに吾れは常にありて、汝らのために汝らの重きくびきを輕からしめる。汝一人ならば吾れを念じて吾れと俱に二人なりと思へ。汝ら二人ならば吾れを念じて吾れと俱に三人なりと思へ。惱める者よ、吾が言葉を讀めば苦しめる魂も輕くなり、悲しめる魂も慰を得ん。そわ吾れは限りなき大愛であるからである。汝ら事にのぞんで吾れを呼べば、自己の知らざる知慧の湧き出づるに驚くであらう。信ぜぬ者、呼ばぬ者は、不憫であるが助けやうがないのである。汝の心の疑が、吾が救の波長に合はないからである。遠くにゐて救はれてゐる人もあるが、近くゐても救はれぬ人もある。仕方のないことであるが不憫である。もつと兄弟たちに『生長の家』を傳へよ。神の愛は貫ひ切りではならぬ。頂いたお蔭を『私』しないで、神の人類光明化運動に協力せよ。『生長の家の神』と假に呼ばしてあるが、『七つの燈臺の點燈者』と呼んでも好い。七つの教とイスラエルの十二の分派が、吾が教で新しき生命を得るのだ。吾が教はどんな宗教をも排斥するやうな狭い宗教ではない。教の太宗であるから宗教と云ふのである。

新天新地の神示

昭和六年五月六日

見よ、吾れ既に天地を新たなりしめたのである。人々よ眼の蔽ひをとれ。吾れは新しき智慧である。新しき生命である。新しき宇宙である。新しき光明である。吾れ臨つて此の世界は既に衰貌したのである。既に信する者の暗黒は消え、醜汚は滅し、病は癒え、悲しみは慰められ苦しみは柔らげられた。神祕を見て人々よ、目覚めよ。覺めて吾が新しき光に照らして、存在の眞實を見よ。吾れは存在の實相を照らし出す完成の燈臺に燈を點するものである。悲しみに泣き濡れた人々よ、いま眼を上げて吾が光を受けよ。汝の悲しみは喜びに変わるであらう。病める者よ、いま病の床より起ちて、吾が生命を受けよ。吾れを拒むな。吾れを信ぜざる者は已むを得ぬ。吾れを信する者は默座して吾れを念じ、吾れに依り頼れ。吾れ汝等に『神想觀』と云ふ觀行を教へたれば、それを爲せ。吾れに汲むものは常に新しき力に潤れないであらう。吾れを呼ぶ

断片語

(生長の家より)

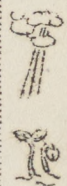
以下は主に病氣に關し訪問者が尋ねてゐる問題に先生の御答へになつた片言隻句』
聖典も『急病』には間に合はないやうでもどかしいと云ふ婦人があつた。

□始終讀で居れば、我慢も出来る。病氣になつて、周章、讀むんだから、そりあ、貴方、我慢が出来ない筈よ、わえ。頭痛……貴女には頭は無いですよ。一言澄んだお声』ハツとする、間髪に迷思を裁つ眞理の平手打ちだ。確かにこれはこの婦人へのみの言葉ではない……泰然と和服の微笑の御姿です。

□血壓病ぢやなくつて、心配病と云ふんですわ、そりや。(靜かに深く澄んだお瞳で) 忘れたら、治つてゐる。思ひ出したら、病氣はある。……忘れたら病氣は無いのですよ。家族全体が治るんでなくや。病人一人だけ、医者へ倅れて行くなんてのけ駄目、わ……倅みも何もせないでいい。心が替れば、心さへかはれば、自然と……いつか治つてゐる。……長命も短命も、心の変化にある。心の変化に隨ふのです。

物質(肉体)が遺傳するのぢやない。念が遺傳するのですよ。念の蓄積……これが因となり、果をつくり……それが病と現はれる……。□視力が弱い……視野が狭くなる……時々痛む……そりや、心を心の視野を延びくとする。廣々とする。晴れくとするんですよ。何よりも自分の頑固を無くする。他人の立場にも立つて見る……ね、今迄、眼に蓋をしておたのだ。見えると思つて開けて居なさい。痛むのは神様が、おハリをして下さるのだ、これで見えて来る。いつもかう思ひなさい。それで、いつか治つてゐる。色盲は拒絶する心の現れ。或は受け容れる。或は受け容れない。……素直に総てを受け容れる心になりなさい。

目次



無駄骨を折るな 谷口雅春

◎ 巻頭言 無駄骨を折るな

◎ 断片語 (生長の家誌より)

◎ 新天新地の神示

◎ 光明の音信日誌

◎ 人間の本性としての価値

◎ 實相体験集

◎ 誌友雜信

◎ 編輯後記

消息欄

◎ 住所録

◎ 英譯生命の實相

人間は誰でも善いことを求めておます。それは私達の魂の底の底に、既に善なる實相があるから善ことを求めてゐるのです。それで、私達は自分か善くならう、他を善くしようと思へば、先づ人間の魂の底の底に在るところの善を知ることが大切なのであります。

そして既に善いものが在る。と云ふ考へから、自分も、或は他も、善いものを引き出すやうにすれば善いのです。ところが、世間では、これをちよつとした事から誤ることがあるので。それは、形に現れて、目に見えたり、心に感じたりする事が悪いから、その悪いものを善くしようと思ふことです。そして人はこれを感じしますけれど、本當は感心出来ないので。なぜならば、最初から善いものは善くなりますが、最後から悪いものは善くなりつてはないので。

つまり無駄なことです。それで生長の家では悪を認めないで善のみ見るのです。

光明之音



一九四四年一月創刊
亞町生長の家誌友會發行
第二輯 五月號